

■ 2007 年度 修士論文要旨 ■

温泉観光地域をめぐるエスノグラフィー： 女性接客従業員の労働と生活世界

高橋 さつき

今や観光は世界最大の産業に成長し、経済効果や社会現象、文化活動として大きな意味を持つ。それを支えるのが観光産業従事者である。観光産業を構成する各事業分野は機械化が難しい接客業務を伴うため、大きな雇用効果を持つのが特徴であるとされる。国内の温泉観光地では女性のサービス就業率が高く、また女性の単身世帯比率も高いことから、多くの女性労働力が吸収されている。「日本ならではのおもてなし」を謳う日本旅館ではどのような演出が行われ、またそこで働く人々が感じている問題とは何だろうか。

彼女／彼らの生活世界、つまり観光地という「非日常世界」における「日常世界」はどのように構築されているのだろうか。旅館という空間・観光地の生活という環境条件の中で、それをどう受け止め、どう生きているのか。このような問題意識を研究することで、現代の生活空間のひとつをミクロに分析し、また観光産業という商業活動の中で創られる接客従業員のイメージを検討することを通して、ジェンダー、エスニシティ、階層などグローバルな面を持つ観光をマクロな視野を持ってとらえることができるのではないかと考えた。

研究方法は、観光現象に関する先行研究調査に加え、国内で有数の温泉観光地域神奈川県箱根町の旅館組合や女将さんたちへのインタビュー、さらに温泉旅館での住み込みアルバイトという形での参与観察を行った。本稿では、箱根町について宿場・温泉地としての歴史や観光地として成立した過程、大消費地に近接する特性などの地域の分析を行う。また歴史資料から、女性への厳しい取締り、遊

女や飯盛女など接遇する側・性的な役割を担う側としての位置づけなどの「旅の男性性」について論じる。そしてイギリスの社会学者ジョン・アーリや感情労働に関する先行研究と参与観察から、「女性的スキル」として接客女性に求められる「心優しいもてなし」や「細かい気配り」、不満を受け止めるなどの補償的役割などのジェンダーバイアスの存在、笑顔や態度の管理による感情労働が行われていることを分析する。そこでは母として、性的な魅力を持った女性としての役割が求められ、そこで演出されるこの「個人的な関係」のために、接客従業員はハラスメントを受けやすい立場にある。

また、日本旅館の演出とシーズンに左右される旅館の特徴は、労働者の社会的特性による分業に作用している。接客従業員は繁忙期に合わせて非正規社員である着物を着た女性、年長者ばかりの事務は正社員、フロントは若い男女である。そして布団上げや食器洗いは派遣の中高年外国人である。このように業務はジェンダーやエスニシティ、学歴などで分業している。サービスという商品は提供する者の社会的特性までが含まれるのである。

さらに、隔絶している土地にある観光旅館業の特性と早朝出勤や“中抜け”に合わせて通勤し易くするという理由から、従業員は住居を提供される。この職住の近接による長時間労働に加えて、接客労働の境界のあいまいさという問題がある。「おもてなし」とは、「マニュアル以上」のことをするのが最大の目標であり、それは労働に見えない労働の遂行を意味する。明確化できない「おもてなし」の名の下に業務以外の労働を要求されてしまうのである。以上の論点は、筆者が接客従業員として体験したことから、ビビッドに問題意識として浮かんだものである。

さらに、ライフストーリーの分析によって、観光に生きる人々の生活世界について、彼女

／彼らの視点から捉えることを目指した。旅館業に携わる人々から語られた言葉から暮らしや想いを考察し、先行研究では注目されない生身の人間が生きる場所の語りを描いた。女将の半生、寮での日常、旅館ごとに異なる生活などが彼女たちから語られている。

そしてこれら観光のまなざしの捉え直しは、私の調査のまなざしの捉え直しも促した。ジェンダー研究などでは、調査者と被調査者の非対称な関係、エスノグラフィックな記述による調査対象の「他者化」といった権力性が指摘されている。私もこれらの困難を強く感じた。しかし生身の人間として関わる中で、調査者 - 被調査者以外のポジショナリティを得ることができた。私が得た、接客女性、新人仲間、寮生活をする者としての困難や共感、豊かな人間活動の描写によって、抱える問題を現在に生きる人々に一続きのものとして感じてもらうことを目指した。

私が身を置いたコミュニティは、観光接客業の労働条件や生活環境の悪さという一つの価値観ではとらえられない。そこには多元的で豊かな人々の生身の暮らしがあるのであり、その視点をなくしては人間活動の場としての観光地は研究できない。それは見られる場から、生きられる場として観光地を捉えなおすことにほかならないのである。

失われた第2次世界大戦の言説空間にみる場所の一考察：

スガモプリズンからサンシャイン・シティへの転換

田代 光恵

本論文は、歴史地理学的な「場所」に対する見方の一考察である。場所を主眼に置いた歴史を描くことに対する一つのモノローグとしている。ある特定の空間を人間の作為によって切り取ったものが「場所」として機能しているが、その「場所」に込められた意味

は本来その「場所」が持っていたものから歪曲・曲解されていることがある。本論文では、それらを暴き出し、場所を主軸にした歴史を顧みることの可能性を提示している。

「場所」に込められた可能性を提示する題材として「スガモプリズン」を選んだ。現在「スガモプリズン」について語られる「言説」はA級戦犯であったり、悪人、忌避、という言葉であったりする。しかし、本当に現在とらえられているような「場所」性が、「スガモプリズン」の本来の姿だったかということ論述した。

具体的に、「スガモプリズン」は、①戦争や戦犯裁判可視化の空間、②忌避されるべき場所、③平和への希求がなされた場所、であったと諸々の先行研究から再定義している。そのような筆者の定義と、現在の言説との乖離を戦犯記念碑問題を一例にしてとらえた。

戦後「戦犯記念碑」をめぐる「スガモプリズン」の場所的な意味の一部が切り取られ、そこで切り取られたものが現在まで「言説」として浸透し利用されてきた。そこでは本来の「スガモプリズン」の姿を描き出していない。その理由は②に大きく関わっているため、それを記述することによって示した。「スガモプリズン」本来の意味から切り離されたそれは、戦争や犯罪や責任という別の政治的な価値を帯びたタームと結び付けられることによって、人々の言説の対象にしがたい「場所」＝忌避されるべき場所、へと変容した。

①において、「スガモプリズン」にまつわる「戦争」や「戦犯裁判」が権力者の側からしか表現されていないことを述べている。ここにいう権力者とは、戦時中日本の政治・軍部を統治していた者のことであり、それに対するものとして一般の兵士を挙げた。「スガモプリズン」を最も長く構成していたのは、A級戦犯の人々ではなくBC級戦犯の存在であったことを歴史的な事実から示し、そこに焦点を当てることによって、私たちのような